



仏法領

ぶつぽうりょう

第102号

発行：真宗大谷派

念信寺

〒824-0202

福岡県京都郡みやこ町犀川上高屋761

☎ 0930-42-0329

Fax 0930-42-0502

ホームページ

nenshinji.org



「名前」

子どもへの初めての贈り物は「名付け」だろう。

子どもの行く末を願い名前を考える。

ただただ、子どもの幸せを願って。

長女は、「優希」

「優しい気持ちを持ち、希望に溢れた人生であるように」。

次女は、「あかり」

「周りを明るく照らす人になって欲しい」

と願いを込めた。

幼い長男を亡くした母は、孫の成長を見ながら

「元気であれば、それだけで幸せ」といつも言っていた。

今も昔も、願いは一つだけ。

(写真・文 大迫光浩)

仏は「南無阿弥陀仏」と名のつておられる

門徒会の研修会で講師の川村妙慶さんが、語ってくれたことが心に残っている。

友人のお寺にかかつてきた女性の電話。「母のお骨があるが、これは生ゴミで出したら良いのか、燃えないゴミで出すのか」と。その友人はあまりのことに返答できなかったという。妙慶さん曰く、「お母さんの人生は、ゴミなのか」。

お骨は単なるモノでなく、その人の人生の重さを象徴している手がかかりなだが、その方はそうは思えないのだろう。これは極端なケースだけどよく考えてみると、私たちにもそういう傾向がある。最終的に大切なことを取るのか、便利さ快適さを取るのか。二者択一では、自分の都合を優先しているのかも知れない。他者のことは見えても、自己都合優先の自分が自分に問題になることがあるだろうかと考えさせられた。

また、妙慶さんがあるお寺にお参りに行った時のお話。駅でタクシーの運転手さんに「〇〇寺さんをお願いします」と言うと、「お寺に何の用事があるのか？」と。「報恩講のお参りに行くのです」と言うと、「お寺なんか要らん、要らん」と、おっしゃる。「どうしてですか？」と尋ねると、「スマホとコンビニと酒があれば良いんだ」と。「ホントにそうなんですか」と聞いても、同じ答え。そのうちにお寺に着いた。

降りざわにもう一度「ホントウにそうなんですか？」と尋ねると、「あんたもしつこいな。女房がコロナで入院して、とうとう一度も見舞いに行けず、ありがとも言えなかった。お骨が今枕元にあるが、寂しくて寂しくてたまらんだ」と。その方に仏様は呼びかけておられるのだが、手を合わせお念仏申すことを知らない。どうしていいかわからないのだろう。

「スマホ、コンビニ、お酒があれば良い」というのは、現代の私たちの有り様を言い当てている。面倒な人間関係や生活の仕方はやめて便利で快適さを求め、合理的に自分の都合、欲を優先してしまっている。そのような私に南無阿弥陀仏と如来は名乗っておられる。お念仏申すのは簡単なことのようにだけど、容易ではない。お念仏のご縁をいただいているのは尊くありがたいことなのです。



「鏡草」というように、呼び名は変わります。

阿弥陀様も同じで、限らない在り方を指す場合は「阿弥陀仏」、量り知れない命を指す場合は「無量寿如来」、量り知れない光を指す場合「無碍光如来」というわけです。

呼び名には意味があり、それぞれの名前を口にする事で、他との区別を付けていきます。人という集団の、日本社会という集合体の中で生きていく上で、名前は自身と自身の関わるものを他から区別し、理解していくための手段だと私は思うのです。



報恩講ってなんだろう？

親鸞聖人の命日

浄土真宗の宗祖である親鸞聖人は1262（弘長2）年11月28日に90歳のご生涯を終えられました。阿弥陀如来、親鸞聖人をはじめ、念仏の教えに生きられた先達に思いを馳せ、その恩徳に感謝し報いるための法要が、報恩講です。

お念仏の教えを聴聞し、自らの生活を振り返る時として、真宗門徒にとって、「一年は、報恩講に始まり、報恩講に終わる」と言われるほど、一年で最も大切な仏事なのです。全国各地の寺院・教会をはじめ、ご門徒の家々においても勤められており「お取越」や「お引上」の名で親しまれています。

「お取越」とは、親鸞聖人の命日が巡ってくる前に取り越してつとめることからそ

う呼ばれており「お引上」も同様の意味です。

報恩講は、人々が寄り添い、お斎をいただくなど、共に触れあいつつ開法する場として、今日まで脈々と勤められています。

あなたはあなた自身で尊いという親鸞聖人のおしえを確かめ直して、感謝とともに自分自身を振り返り、生き方を問い直すのが「報恩講」という行事です。ぜひ努めて毎年足を運び、心静かに親鸞聖人の教えに耳を傾けていきたいものです。



以上、「仏事のはてな」「仏事なるほど相談室」東本願寺出版より引用。

秋のお彼岸法要

2025年9月27日土、28日日午後

講師 瓜生 崇 先生

（滋賀 玄照寺住職）



熊本からご聴聞に

今日はお彼岸の法要ですね。なぜ「彼岸」なのかといったならば、太陽が真西に沈むからなんです。浄土という世界は西にあるとお経に説かれています。現実には西の方に行ったらさういう世界があるということを書いてあるわけではなくて、命はすべて太陽によって支えられています。その太陽は西に沈む。西に浄土があるというの、あらゆる命が帰るべきところという意味がある。だからその太陽が真西に沈んでいくこの時期にお彼岸のお勤めをします。

お彼岸にお参りすると、お仏壇の中にワッカップとか置いてます。これおじいちゃんが好きだったからです。死んだ人の好きだったものをお仏壇の中にいっぱい入れて、それが「供養」だと思いがちです。

『華嚴経』の普賢菩薩はあらゆる人々のところに行つてあなたは必ず仏様になる人ですと言つて敬つて、仏の教えを聞かせてくださいてお願いして回つたんです。これが「諸仏供養」で「供養」の原点なんです。わかりやすく言うと、仏の教えを聞くことなんです。これが最も素晴らしい供養です。だから浄土真宗の場合は、どんな法事でも、必ずお説教があるんです。仏の教えに私たちが触れていくことなんだって言うんです。

ここで親鸞聖人は衝撃的なことを言っています。「私はお父さんお母さんのご供養のためにお念仏を一回たりとも申したことはありません」と。法事なんかに行つても、亡くなった親父もこれで喜んでいてと思いますとか。立派な法名をつけたならば、亡くなったおじいちゃんもこれで喜んでもらいますって。そういう形で供養していく。「追善供養」って言います。ところが親鸞聖人は、自分はこれは一切やらないって言ったんです。



9.27 皆作法要

一見冷たく感じますが、どうしてかという、仏様の眼から見たならば、実はこの世界の生きとし生けるものは、みんなお父さんであり、お母さんであり、兄弟なんだと、親鸞聖人は言われるんです。あらゆる生きとし生けるものの命というのは、全部お互いに深い関連性を持つてつ

ながつていて、私一人の命とか、私のお母さんとか、私のお父さんとか、仏さんの目から見たら、本来そういうものはないんだ。米粒一粒の中に宇宙の歴史が全部入つてるんだって言うんです。



9.28 皆作法要

ところが、我々は、あらゆるものを自分を中心に物事を考えて、遠いとか近いとか、軽いとか重いとか見ていきます。だからそのこと自体が実は仏の心から背いてるんだって親鸞聖人も言うわけです。仏さんに向かって自分とはとても大きなことをしているように見えてるんだけど、本当にあなたさうですかって親鸞聖人は問い尋ねてるんですよ。結構怖いことを言われているんです。

でもこの後、親鸞聖人は私たちは人間である限りそこからどうしても逃れることはできないって言うんです。あらゆる生きとし生けるものを自分の父とし母とし敬つてそして供養するようなことが私たちにできるだろうかと言ったら、親鸞聖人はそんなことできるはずがないだろうと。だから、仏になってこれらの人々を救うしかないんだって言うことを言われます。

本当にあなたがお父さんお母さんのために追善供養をしたいと思うんだつたらば今の生の後に仏として生まれてそして仏の智慧を持つてこれらの人を助けていくしかないんだと。なんで親鸞聖人はこういうことを言われるのか。実はね、こういうことを言われるようになっていくのは親鸞聖人の晩年で、息子の「善鸞義絶」という厳しい出来事にあうわけです。

（以上抄録）



